

ベルジャーエフの精神的転換と唯物論的歴史理解

佐藤, 正則
九州大学大学院言語文化研究院 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/1456024>

出版情報 : 言語文化論究. 32, pp.11-20, 2014-03-18. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

ベルジャーエフの精神的転換と唯物論的歴史理解

佐藤正則

はじめに

20世紀初頭のロシアでは、知識人の中で大きな精神的転換が生じた。1860年代以来、ロシアの知識人たちは実証主義、唯物論、無神論、リアリズム芸術に傾倒してきた。世紀の替わるころになると、知識人たちは観念論、宗教思想、象徴主義に接近するようになった。ニコライ・ベルジャーエフ(1874-1948年)は、こうしたロシア知識社会の精神的転換を体現する代表的人物である。ベルジャーエフは1890年代末にマルクス主義者として登場し、マルクス主義をカント哲学と結びつけようと試みたが、1900年代初頭から本格的に観念論を唱えるようになり、さらに1904年ごろからは観念論哲学をも批判して、当時の彼が「新たな実在論(リアリズム)」と呼んだ独自の宗教哲学へと移行した。西側では、かねてよりマルクス主義にたいする先駆的な批判者として知られてきた。

これまでの研究や紹介では多くの場合、この転換が急激で振幅の大きなものであることが強調され、そのためマルクス主義のすべてが完全に否定されたかのように記述されてきた。宗教哲学への転換以前のベルジャーエフの思想について、従来の研究の大半がごく簡単にしか触れていないことも、こうした印象を強めている。他方、我が国のベルジャーエフ研究者の中には、転換の前後でベルジャーエフの問題意識や思想の枠組みは保たれていると、あるいは変化したのは用語法のみであると主張する論調が見られるが、その際、はじめからベルジャーエフの思想はマルクス主義とはあまり関係がなかったとされている。¹

当時のベルジャーエフ本人は、1903年5月に執筆した短い略歴(1904年に刊行)において、1902の論文集『観念論の諸問題』を基点として「実証主義から形而上学的観念論に最終的に移行しつつある」と述べているが、マルクス主義については、「このうち一連のリアリズム的な社会思想は保持するが、一体的世界観としては否定する」としている。また「マルクス主義と唯物論とを結びつけたことはけっしてない」と断じている。この記述に従うならば、ベルジャーエフは転換以前から唯物論をしりぞけていたことになるが、唯物論のないマルクス主義とはいかなるものであるのかも、また転換後も保持される「リアリズム的な社会思想」の内容も、このあまりに短い略歴では説明されていない。²

はたしてベルジャーエフは、マルクス主義のどの部分に惹かれ、どの部分を新カント派哲学によって補強しようとしたのか。精神的転換によってマルクス主義のすべてが一度に放棄されたのか、それともいわゆる転換後もマルクス主義のある部分はベルジャーエフの思考に影響をあたえ続けたのか。観念論さらに宗教哲学へと移行しつつあった思想家にとって、マルクス主義はどのような意味をもっていたのか。こうした点を明らかにするために、本稿では、ベルジャーエフが論壇に登場する1899年から、論文集『永遠の相の下に』と著書『新たな宗教意識と社会性』を刊行する1907年までの時期を対象として、ベルジャーエフのマルクス主義観を検証する。

1. マルクス主義とカントとの結合の可能性、マルクス主義の内的矛盾

ベルジャーエフのはじめての著書『社会哲学における主観主義と個人主義』（1901年）は、ピョートル・ストルーヴェ（1870-1944年）による長文の序文を付して出版された。ストルーヴェは、ベルジャーエフよりも一歩先んじてマルクス主義とカント哲学との融合を試みており、また1899年にドイツで刊行した著書『マルクスの社会発展理論』（ロシア語訳は1905年）では、マルクス主義の内部に社会革命の概念と唯物論的歴史理解との、また弁証法と唯物論との矛盾があると論じ、社会革命概念を否定していた。³

ベルジャーエフはこの時期、そのストルーヴェに宛てた書簡（1900年2月25日付（露暦））で、自分には危険な形而上学的傾向があると述べ、自身の課題を「マルクス主義を雲上の高みに引き上げ、観念論の特徴を付与する」ことであると宣言し、「実証主義、自然主義の歌は終わって、より喜ばしく輝かしい世界観」がつくられると予言している。ベルジャーエフによれば、「絶対的真理、絶対的公正にたいする我々の渴望は自己欺瞞や幻想ではない」のであって、「善の自立的な至上の倫理とその権力を認めなければならない」し、「それらは進歩的社会的志向と結びつかねばならない」。そのためにはカント主義が大きな役割をはたすとベルジャーエフは主張するが、しかし「未来の哲学はたんなるカント哲学ではなく、カント哲学では不十分」だとしている。⁴ここでベルジャーエフは実証主義と自然主義とを否定しているのだが、それらからマルクス主義を切り離すことが可能だと考えている。つまりベルジャーエフにとって、実証主義や自然主義はマルクス主義の本質ではない。また、カント哲学を当初から手放しで評価しているわけではなく、たんにマルクス主義の欠陥をカント主義で補うことをめざしているのではないことがうかがわれる。

1901年の著書でベルジャーエフは、ロシア独自の社会主義の可能性を説くナロードニキの理論家ニコライ・ミハイロフスキー（1842-1904年）の主観主義を批判することをつうじて、同時にゲオルギー・プレハーノフ（1856-1918年）に代表される既存のマルクス主義をも超克することをもくろんでいた。この著書の第1章の冒頭でベルジャーエフは、主観的なものと客観的なものとの相互関係の問題が実証主義（ミハイロフスキー）と弁証法的唯物論（プレハーノフ）双方の弱点だととして、この問題はカントの批判哲学とマルクスの社会的一元論との共通基盤においてのみ解決可能だと主張している。⁵ベルジャーエフは、カントとマルクス主義を、たがいにあいられない異質なのではなく、一定の共通基盤をもつものとみなしている。

また、先の書簡でベルジャーエフは、ストルーヴェに賛意を示し、「社会革命の概念は、認識論的に見て、無根拠として捨てられなければならない。客観的には社会進化のみがありうる」と述べている。このマルクス主義の内的矛盾の問題は、1904年の「新たな实在論（リアリズム）」への転換後に、あらためて論じられる。1905年の論文「マルクス主義のカテゴリズム」で、ベルジャーエフは弁証法的唯物論の根本的矛盾を、「超（ウルトラ）経験論的、实在論的で唯物論的な認識理論が、同時に超（ウルトラ）合理主義的でもある」点に見てとり、それは「物質的な世界過程が理性をもつという叡智的信仰、事物の論理や物質の理性への信仰にもとづいている」と述べている。ここでベルジャーエフがとりあげているのは、弁証法と唯物論との間の矛盾である。その際、ベルジャーエフは、「弁証法は観念 - 論理的な過程であって、それはただ大理性においてのみ可能である」と述べ、「必然の王国から自由の王国への飛躍」や「量から質への転化」といった弁証法的な公式を、非科学的な神秘主義としてしりぞけている。1906年の論文「ロシア・マルクス主義の歴史と心理によせて」でも、ベルジャーエフは「科学的リアリズムと宗教的ユートピア主義との矛盾」をマルクス主義の危機の本質とみなし、ここでも、社会革命理論を誤った理論であり錯覚であると断じ、「社会

革命」は社会進化のマルクス主義的理解にすぎないとしている。⁶

このようにベルジャーエフは、ストルーヴェと同じように、マルクス主義の中に唯物論と弁証法との、また史的唯物論と社会革命論との間の矛盾を見いだしており、弁証法と社会革命論を否定している。この見かたには精神的転換の前後でも変化は見られない。

2. 哲学的唯物論の否定、「一元論的認識理論」の試み

史的唯物論と哲学的唯物論との関係、また史的唯物論における下部構造と上部構造との関係をめぐる問題は、当時からロシアのマルクス主義者たちの間で議論の的となっていた。プレハーノフは史的唯物論と哲学的唯物論とを分かちがたく結合したものとみなし、18世紀フランス唯物論にもとづいて、マルクス主義の哲学・認識理論を体系化しようとした。プレハーノフは、現象世界の背後の物自体が人間の感覚器官に作用することによって、我々の感覚世界が生じると主張した。物自体と感覚世界とは原因—結果関係にあるとされる。プレハーノフは史的唯物論の構築にあたって、下部構造と上部構造と関係をやはり自然科学的な原因—結果によって説明していた。しかし、自然科学的な唯物論を認識理論や歴史にもちこむプレハーノフの考えかたにたいしては、1890年代末から疑義が呈されるようになった。ベルジャーエフもまた、そうした批判的視座に立つマルクス主義者のひとりであった。1901年の著書で、ベルジャーエフは唯物論的歴史理解（ベルジャーエフは史的唯物論をこう呼ぶ）と哲学的唯物論との間の論理的連関を明確に否定している。⁷

哲学的唯物論については、ベルジャーエフは、はじめて公表した論文「F・A・ランゲと批判哲学」（1899-1900年）の時点で既に完全に拒絶している。この論文では、人間の知覚を外部世界のたんなる反映とみなす素朴実在論、世界を物自体と現象世界とに分ける二元論をしりぞけ、現象のみにもとづく「一元論的認識理論」をうちたてようと試みている。ベルジャーエフは、カントの認識論に従い、普遍的妥当性と普遍義務性をもつ形式的な規範が、あらゆる経験に先行し、その必要条件となっていると主張する。認識が客観的であるかどうかは、この基準を満たしているかどうかで判断される。この基準は経験から導きだされるものではなく、ア・プリオリに存在するもので、すべての人々が従わなければならない。ベルジャーエフは「存在の实在性は認識主観に關係する現象に尽きる」と述べ、「認識できるものと認識できないものとに、現象の世界と経験の彼岸にある物自体の世界、カント的な「叡智的世界」の隠れ家とに、世界を二元論的に分割するいかなる根拠もはやない」と結論づけている。⁸ カントの批判哲学によって、カントの物自体を克服しようとしたのである。

こうしてベルジャーエフは、物自体と認識との関係を原因—結果関係とみなすマルクス主義の哲学的唯物論を否定し、それに代わる認識理論をつくろうとした。しかし、ベルジャーエフよりも数年早く「一元論的認識理論」を提唱していたストルーヴェは、ベルジャーエフが一元論的認識論を十分に論じていない、と評している。また、研究者たちもこの論文の試みを成功とはみなしていない。⁹ おそらくベルジャーエフ本人にとっても満足できるものではなかったのではないか。次の著書では新たな思想的試みがなされる。そこでは、マルクス主義階級理論と唯物論的歴史理解が大きな役割をはたすことになる。

3. 著書『社会哲学における主観主義と個人主義』と唯物論的歴史理解

先に触れたように、ベルジャーエフは1901年の著書で、主観主義と客観主義との関係を解決する

と宣言している。この著書でもベルジャーエフは、論文「ランゲと批判哲学」の場合と同じように、カントの批判哲学に則って真理の基準を定めている。「我々のすべての認識は経験的だが、認識の経験が可能なのは、同一律や空間と時間の形式、因果性のカテゴリーなどといった必要条件が論理的に先行しているからである」と述べ、「客観的で真なるものとは、認識論的に規範的なものである」としている。¹⁰

しかし、この著書では、主観主義と客観主義との矛盾を解決するために、新たな視点が導入されている。ベルジャーエフは、「あらゆる進歩的社會階級の心理（主観主義）が、現象にたいする客観的な（科学的な意味での）関係の最適の基盤をつくる」と主張し、人類の知的発展を、「客観的で絶対的な真理にしだいに接近していくこと」だと定義している。¹¹ つまり、より進歩的な階級の主観ほど客観的真理に近い。ベルジャーエフは、真理を絶対的なものとみなす立場を堅持しながらも、そこにマルクス主義の階級理論を導入することによって、主観性と客観性との対立を和解させようとしている。

この著書で、ベルジャーエフは、社會の発展を機械的な原因—結果関係でとらえる經濟決定論を否定している。「歴史過程全体は、その根底に人間の自然との闘争があり、それは人間の生産力の発達において表現されるが、この過程全体が心理的環境の中で展開される。人間の心理は生のための社会的闘争の過程において成長するが、生のための社会的闘争は心理的過程であり、いかにしても力学の用語では解釈できない」と主張している。¹²

しかし、ベルジャーエフは經濟決定論を史的唯物論の本質とは考えない。社會現象を物質の運動とみなす解釈について、「唯物論的歴史理解はこのような自然主義的試みとはなんら共通性をもたない」と批判し、さらに「史的唯物論はいかにしても宿命論的な、あるいは機械論的な社會過程理論として解釈することはできない」と断じている。ベルジャーエフは、史的唯物論の基本概念である社會の生産力の発展を、「人間と自然との間の能動的過程、人間と自然との生の維持のための闘争」と定義づけている。それによると、「生産力の発展は人間の不断の能動性を前提とし、意志を前提としている。生産の經濟的過程は機械的な過程ではない。それは人間の手を介して進展するのであり、その背後にはやはり意志が潜んでいる」。¹³ ベルジャーエフは唯物論的歴史理解そのものに反対しているのではない。唯物論的歴史理解に、自然との闘争という人間の能動性の視点を導入しようとしている。これは史的唯物論の新たな解釈の試みと言ってよい。そして、ベルジャーエフはこの修正された唯物論的歴史理解を絶対的理念と統合させている。唯物論的歴史理解は形而上学的な世界観や目的論的な歴史観と調和するのみならず、それらに現実的で科学的な理論的基盤をあたえるものとみなされている。

倫理の問題についても、ベルジャーエフは同じやりかたで解決しようとしている。ミハイロフスキーや既存のマルクス主義においては、時代や階級によって倫理は異なると考えられていた。ベルジャーエフはこれをしりぞけ、善は人間の経験から導きだされるものではなく、人間の外部にそれ自体として存在するものであり、絶対的で客観的なア・プリオリだと主張する。他方、各階級の道徳意識は主観的で相対的なものとされる。しかし、真理の場合と同様、ベルジャーエフは倫理の問題にも階級理論をもちこむことによって、主観性と客観性とを和解させようとする。ベルジャーエフはこう述べている。「もちろん道徳性は、真理と同じように、階級的なものではありえないけれども、しかし歴史的には階級的な形をとり、その担い手は全人類の進歩の旗を掲げる社會階級である」。ベルジャーエフの考えでは、より進歩的な階級の道徳意識は絶対的倫理により接近しており、おのおのの時代においてその時代の進歩的階級が、先行する時代よりも高度な道徳性をつくりだす。ベルジャーエフは歴史の過程に道徳的発展を見てとっている。こうして人類の歴史は絶対的な善へと

接近していく過程ととらえられる。¹⁴

このように1901年の著書において、ベルジャーエフは、真理や倫理を経験世界を超えた絶対的なものとみなしながらも、それが現実社会においては進歩的階級によって体現されると考えており、歴史の過程において人々が絶対的真理と倫理に接近していくという世界観・歴史観を構築している。そこで主観主義と客観主義とを調和させる主要な役割をはたしているのは唯物論的歴史理解である。ベルジャーエフは、唯物論的歴史理解を導入することによって、哲学的唯物論を超克する世界観を構築しようとしたのである。ベルジャーエフはたんに、マルクス主義をカント哲学によって補おうとしたのではなく、主観主義と客観主義との矛盾の問題を、カント哲学ではなく、むしろマルクス主義の階級理論と唯物論的歴史理解によって解決しようとしている。それはカント哲学の絶対的真理や倫理に、人間社会での実現のための現実的理論をあたえることを意味していた。¹⁵

4. 観念論への精神的転換と唯物論的歴史理解

1901年の著書出版直後に、ベルジャーエフは観念論への支持を表明する。同じ年に論文「観念論のための闘い」を発表し、翌年にはストルーヴェやセルゲイ・ブルガーコフ（1871-1944年）らと共に論文集『観念論の諸問題』を刊行する。論文「観念論のための闘い」では、「マルクス主義は精神-文化的内容に貧しいことが明らかになった。哲学、道徳性、芸術といった観念的課題はマルクス主義によっては充分には意識されておらず、時代の社会的ブルジョワ性との闘争において、マルクス主義はその精神的ブルジョワ性を越えることがいまだにできていない」とマルクス主義を批判したうえで、「ただ哲学的観念論のみが、実践的観念論者たちの生を満たしている真実と公正の渴望を、承認し基礎づけることができ、道徳的善と人間の自然法の絶対的価値を認めることができる」と説いている。¹⁶

しかし、この論文にも、先の著書と同じような唯物論的歴史理解と観念論との結合が見られる。ベルジャーエフは、上部構造を下部構造のたんなる反映とみなす考えをしりぞけ、「イデオロギーは経済発展によって自動的にはつくられるものではなく、人々の精神的な活動によってつくられるのであり、イデオロギーの発展は、絶対的な、いかなる進化からも独立した意義をもつ精神的価値の開花にほかならない」と説く。しかし続けて、「イデオロギーは実際には生産力の状態に条件づけられており、経済発展は実際に人類のイデオロギー発展の基盤をつくる」と述べている。このように、ベルジャーエフは、一方ではイデオロギーの精神的独立性を主張しながらも、他方ではイデオロギーが物質的生産力によって制約を受け、経済発展に依存していることを認めている。¹⁷

実際、この論文でベルジャーエフは、観念論を唱えながらも、マルクス主義を放棄しようとはしていない。「マルクス主義の最大で不朽の功績を公式化するならば、次のようになるだろう。マルクス主義は、ただ物質的、社会的組織化が人間の生の理想的発展にとっての基盤となりうること、人間の目的はただ自然にたいする経済的支配の物質的条件においてのみ実現するということを、初めて明らかにした」と評価している。また1902年の論文「悲劇の哲学によせて」でも、ベルジャーエフは「現代の社会運動に本質的で、マルクス主義に最良の表現を見いだすリアリズムと、精神的貴族主義がその運動にもちこまねばならないイデアリズムとの統合」の必要性を訴えている。¹⁸

倫理問題についても、1901年の著書と同じ見解がくりかえされている。この問題は、論文集『観念論の諸問題』に収められた論文「観念論に照らした倫理問題」で、くわしく論じられている。ベルジャーエフは、「道徳性とは、なによりもまず、人間の自分自身にたいする内的な関係、自己の精神的自我の探求と実現であり、また「経験的な」意識における「規範的」な意識の勝利」であると

述べている。この定義は全面的にカントに依拠している。しかし、ベルジャーエフは、「どのようにして道徳法則が人間の生において実現されるのか、またされなければならないのかという点にかんしては、カントはほとんどなんらの指摘もしていない」と批判し、「道徳法則は、人類の生において、社会的進歩によって具現する」のであり、「それゆえ我々は経済的發展を要求し、より完全な生産形式を歓迎する」と述べている。¹⁹ カントに無批判に追随しているのではなく、カントの弱点を唯物論的歴史理解によって補強しようとするベルジャーエフの意図がはっきり示されている。

たしかにこの時期には、マルクスの史的唯物論を批判し、ヘーゲルの歴史哲学をより高く評価する発言も見られる。1903年の論文「史的唯物論批判」では、歴史哲学にとってはマルクスよりもヘーゲルのほうがより貢献したと述べている。さらに、「私は社会学に適用されたいかなる一元論にも、ありきたりの機械論的進化論にも断固反対するが、歴史哲学つまり歴史過程の形而上学的理解においては、唯心論的一元論と観念論的發展理論の支持者である」と述べて、史的唯物論を批判している。しかし続けて、「マルクスのリアリズム的社会学とフィヒテとヘーゲルの観念論的歴史哲学との統合が必要である」と述べており、依然としてマルクス主義を全面的に否定しようとはしていない。²⁰

このように、観念論への転換を宣言したものの、ベルジャーエフはマルクス主義を完全に否定してしまったわけではなく、マルクス主義の唯物論的歴史理解によって、カント哲学に現実的な基盤をあたえようとしており、唯物論的歴史理解を保持している。

5. 「新たな実在論」への精神的転換と唯物論的歴史理解

ベルジャーエフが観念論の立場にいた期間は短く、1904年には観念論を批判して、独自の形而上学的哲学の構築をめざすようになる。この新たな志向については、論文集『永遠の相の下に』の序文「実在論について」（1906年）で、簡潔にまとめられて表明されている。ベルジャーエフは実証主義と観念論とともに実在性の感覚に欠けるとして批判している。実証主義は「存在を形而上学的幻影であると説明し、ただ現象性、諸過程、意識の状態のみを認め、出口の無い幻想説をもたらす」。他方、観念論は「存在ではなく、ただ規範、観念、意識の状態しか認めない」。ベルジャーエフは現象世界のみを実在的とみなすそれまでの立場を大きく改め、現象世界の背後にある形而上学的存在を真の実在性と主張するようになる。しかし、ベルジャーエフは形而上学的存在を不可知とはみなさない。「我々の政治は神秘的実在性を歴史的現象性の下で洞察しなければならず、我々の目的を世界の宗教的意味と結びつけなければならない」と述べている。²¹

観念論への転換を宣言した直後にはヘーゲルに肯定的な発言も見られたが、1904年にドイツ観念論を合理主義としてしりぞけた以後は、史的唯物論への批判は影を潜め、ふたたび弁証法が批判的となっている。「新たな実在論」への転換を宣言した論文「新しいロシアの観念論について」（1904年）では、ヘーゲルは汎論理主義であり、存在を無にするものであると非難されている。²² また、既に見たように、マルクス主義をとりあげた2本の論文「マルクス主義のカテキズム」と「ロシア・マルクス主義の歴史と心理によせて」では、マルクス主義に内在するヘーゲル的要素である弁証法がもっぱら批判の対象となっている。

他方、論文「ロシア・マルクス主義の歴史と心理によせて」において、ベルジャーエフは、自身がマルクス主義の「リアリズムの科学的思想」と呼ぶのは「物的生産力の發展理論」のことであると解説している。ベルジャーエフはそれを、あらゆる社会発展と社会制度の基礎であり、自然にたいていする人類のたゆまぬ勝利をもたらすものと、肯定的に評価している。²³

1906年の論文「宗教としての社会主義」（翌年著書『新たな宗教意識と社会性』に第3章として収録）では、社会主義を「中立的社会主義」と「宗教的社会主義（宗教にとって代わろうとする社会主義）」に分けている。ベルジャーエフは、マルクス主義を「社会主義的宗教の最も完成された形態」とみなして批判を展開しているが、その際、マルクス主義的社会主義の本質を崩壊論と社会革命論に表れる終末論的期待に見てとっている。他方、この著書に書きおろされた第4章「社会主義の真実」では、「中立的社会主義」について肯定的な議論が展開されている。それによれば、宗教的には中立の社会的環境において、「原初の自然的必然性からの脱却、原初の隷従からの脱却という、純人間的過程」が進行するのであり、これには万人が参加しなければならない。ベルジャーエフは、新たな宗教運動と中立的社会主義とを結びつける必要を説き、「世界の肉を、人類の社会集団を容容させ聖化する神秘的転換は、それなりの技術的側面を、従属的諸機能を伴っており、労働運動の具体的諸形態や経済的生産性の増強等々は、この技術的側面と結びついている」と述べている。²⁴

このように、「新たな实在論」への精神的転換の後も、前衛階級の主導的役割については論じられなくなるものの、唯物論的歴史理解にたいするベルジャーエフの基本的な態度には大きな変化は見られない。形而上学的な存在を真の实在性とみなしながらも、それらが現実世界に具現されることを望んでおり、その現実的理論としてのマルクス主義の唯物論的歴史理解を放棄しようとはしていない。

おわりに

ベルジャーエフは1899-1901年の時期に既に、マルクス主義の中に唯物論と弁証法、社会進化の理論と社会革命の理論、また唯物論的歴史理解と哲学的唯物論との間の内的矛盾を見だし、このうち哲学的唯物論、弁証法、社会革命を非科学的として当初から拒絶していた。しかし、唯物論的歴史理解と社会進化の理論については、経済的決定論を否定しながらも、絶対的理念を人間社会で実現可能なものとする現実主義的理論として評価していた。この時期、ベルジャーエフは、マルクス主義の認識理論や倫理観を主観主義的で相対主義的なものと感じており、カント哲学の批判主義や絶対的真・善を導入することにより、マルクス主義を客観的なものにしようと試みていた。しかし、同時に、マルクス主義の唯物論的歴史理解と階級理論によって主観主義と客観主義との矛盾を解決し、カント哲学の絶対的理念に、それを人間社会で実現するための現実的根拠をあたえようとした。

唯物論的歴史理解にたいするベルジャーエフの解釈と評価は、1901年の観念論への、さらに1904年の「新たな实在論」への精神的転換以後も、大きくは変化していない。精神的転換にもかかわらず、ベルジャーエフはマルクス主義の唯物論的歴史理解を容易に捨てることができない。ベルジャーエフがマルクス主義を完全には放棄しなかったのは、マルクス主義の掲げる経済的平等や公正といった社会的理想に共感していたためだけではない。また、転換以後のベルジャーエフに見られる唯物論的歴史理解にたいする肯定的発言を、転換以前の思想のたんなる残滓とみるべきではない。それはベルジャーエフの世界観・歴史観の核心と結びついている。

ベルジャーエフは当初より人間社会を超えた絶対的な真理や倫理の存在を力説しており、さらに1904年以後は現象世界を超えた形而上学的な存在を真の实在性と主張するようになる。しかし、経験世界を超えた絶対的なものを志向しながらも、ベルジャーエフはけっして経験世界を否定しない。絶対的な真理や善、また形而上学的な存在を現実社会から完全に遮断させようとはせず、現実社会の人類の歴史において、人間集団の能動的な活動によって具現されていくものと考え、歴史を絶対

的原理が現象世界にしたいに具現されている過程と見ていた。マルクス主義の唯物論的歴史理解は、ベルジャーエフにとって、絶対的な価値や理想が人間社会において人間集団の能動的な活動によって実現されるという自身の世界観・歴史観に、理論的で現実的な根拠をあたえるものにほかならなかった。

注

- 1 精神的転換以前のベルジャーエフの思想にある程度紙幅をさいている研究には、以下のものがある。Kindersley, Richard, *The First Russian Revisionists: A Study of 'Legal Marxism' in Russia*, Oxford: Clarendon Press, 1962; Mendel, Arthur, *Dilemmas of Progress in Tsarist Russia: Legal Marxism and Legal Populism*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1961; Смирнов, И. «От марксизма к идеализму»: М. И. Туган-Барановский, С. Н. Булгаков, Н. А. Бердяев. М., Русское книгоиздательское товарищество, 1995; 根村亮「ベルジャーエフとストルーヴェ (1901 - 1909)」『スラヴ研究』第37号129-153頁1990年。大須賀史和『ベルジャーエフの思想 哲学の形成と問題群』東京外国語大学大学院地域文化研究科博士論文、1997年。
- 2 Бердяев, Н. А. Автобиография // *Бердяев. Самопознание*. М., Книга, 1991. С.353, 352.
- 3 Струве, П. Б. Марксовская теория социального развития. Киев, 1905.
- 4 Философский дебют Н.А.Бердяева (Письма 1899-1900 гг. [к П.Б.Струве]) // *Вопросы философии*. 1993 №4. С.151.
- 5 Бердяев. Субъективизм и индивидуализм в общественной философии. М., Канон+ ОИ «реабилитация», 1999. С.90-93.
- 6 Философский дебют Н.А.Бердяева, С.152, Бердяев. Sub specie aeternitatis: опыты философские социальные и литературные (1900-1906гг.). М., Канон+ОИ «реабилитация», 2002. С.267, 270-273, 427, 432.
- 7 Бердяев. Субъективизм и индивидуализм. С.150. この時期のロシア・マルクス主義者の間での哲学論争にたいする佐藤の見解については、以下を参照のこと。佐藤正則「二十世紀初頭ロシア思想の新たな見かた：知的転換と知識人の中の論争をめぐって」松井康浩編『二〇世紀ロシア史と日露関係の展望：議論と研究の最前線』九州大学出版会、2010年、13-37頁、佐藤正則「革命と哲学：世紀転換期ロシアにおけるマルクス主義者たちの哲学的模索と論争」塩川伸明・小松久男・沼野充義編『ユーラシア世界 第3巻 ユートピアと記憶』東京大学出版会、2012年、51-76頁。
- 8 この論文ははじめ、ドイツ社会民主党の機関誌『ノイエ・ツァイト』にドイツ語で掲載され、ロシアでは1900年に雑誌『神の世界』に掲載された。本稿ではロシア語版をもちいる。Бердяев. Ф. А. Ланге и критическая философия // *Мир Божий*. 1900 №7. С.229, 236.
- 9 Струве. Предисловие.С.19, 根村「ベルジャーエフとストルーヴェ」132, 147頁、レスラー『ベルジャーエフ哲学の基本理念：実存と客体化』松口春美訳、行路社、2002年、12頁。
- 10 Бердяев. Субъективизм и индивидуализм. С.95, 96.
- 11 Там же. С.118, 121.
- 12 Там же. С.149-150.
- 13 Там же. С.150, 173.
- 14 Там же. С.138, 143, 144.

- 15 研究者たちの中にも、ベルジャーエフが1901年の著書でカントの絶対的真理とマルクス主義の史的唯物論とを結合していることに違和感を示す者たちがいる。レスラーは、「やや強引すぎる」結合であり「一貫した哲学概念の印象を与えない」と述べ、根村亮は「認識論から逃避し、歴史実践的な課題に目的をずらして」いると評している。レスラー『ベルジャーエフ哲学の基本理念』16頁、根村「ベルジャーエフとストルーヴェ」132頁。
- 16 *Бердяев. Sub specie aeternitatis. C.17, 26.*
- 17 Там же. С.35.
- 18 Там же. С.17, 68.
- 19 Там же. С.85, 95, 96.
- 20 Там же. С.124 133, 134.
- 21 Там же. С.7.
- 22 Там же. С.176.
- 23 Там же. С.429.
- 24 ベルジャーエフ『ベルジャーエフ著作集 第2巻 新たな宗教意識と社会性』青山太郎訳、行路社、1994年、175-177, 188, 233-236頁。

Перелом в мировоззрении Н. А. Бердяева и материалистическое понимание истории

Масанори САТО

Настоящая статья посвящена взглядам Н. А. Бердяева по отношению к марксизму в период с 1899 по 1907 год. Дело в том, что уже в 1899-1901 годах он обнаружил в марксизме противоречия между материализмом и диалектикой, между материалистическим пониманием истории и философским материализмом. Вследствие этого, мыслитель отверг философский материализм, диалектику и идею социальной революции и осознал необходимость дополнить марксизм критицизмом, учением Канта об абсолютной истине и нравственности. В то же время, опираясь на материалистическое понимание истории, он постарался разрешить противоречие между субъективизмом и объективизмом и дать абсолютным идеям Канта теоретическую основу для воплощения их в общественной жизни. Отрицая экономический детерминизм, Бердяев защищал материалистическое понимание истории, считая таковое жизнеспособной теорией для осуществления абсолютной идеи в человеческом обществе.

В 1901 году Бердяев перешел к идеализму, а в 1904 году – к метафизической философии, которую он называл тогда «новым реализмом». Впрочем, несмотря на такую духовную эволюцию, его отношение к материалистическому пониманию истории, в сущности, не изменилось. В этом смысле, положительные высказывания философа о материалистическом понимании истории не следует считать остатками его прежнего мировоззрения.

С самого начала своего творческого пути Бердяев неизменно отстаивал идею о существовании абсолютной истины и нравственности, а после 1904 года признал метафизическое бытие истинной реальностью. Тем не менее, несмотря на свое постоянное стремление к абсолютному, он никогда не отказывался от эмпирического мира. Бердяев не мог полностью отделить абсолютную истину, нравственность и метафизическое бытие от действительного общества. По его мнению, последние реально воплощаются в истории человечества через деятельность людей. Для Бердяева материалистическое понимание истории оставалось как реальной, так и теоретической основой своего мировоззрения.